

三つの窓

芥川龍之介



一等戦艦××の横須賀軍港へはいったのは六月にはいったばかりだった。軍港を囲んだ山々はどれも皆雨のために煙っていた。元来軍艦は碇泊したが最後、鼠の殖えなかつたと云うためしはない。——××もまた同じことだった。長雨の中に旗を垂らした二万噸の××の甲板の下にも鼠はいつか手箱だの衣囊だのにもつきはじめた。

こう云う鼠を狩るために鼠を一匹捉えたものには一日の上陸を許すと云う副長の命令の下つたのは碇泊後三日にならないう頃だった。勿論水兵や機関兵はこの命令の下つた時から熱心に鼠狩りにとりかかった。鼠は彼等の力のために見る見る数を減らして行つた。従つて彼等は一匹の鼠も争わない訣に

は行かなかつた。

「この頃みんなの持つて来る鼠は大抵八つ裂きになつてゐるぜ。寄つてたかつて引つぱり合うものだから。」

ガウルウムに集つた将校たちはこんなことを話して笑つたりした。少年らしい顔をしたA中尉もやはり彼等の一人だつた。つゆ空に近い人生はのんびりと育つたA中尉にはほんとうには何もわからなかつた。が、水兵や機関兵の上陸したがる心もちも彼にもはつきりわかつていた。A中尉は巻煙草まきたばこをふかしながら、彼等の話にまじる時にはいつもこう云う返事をしてゐた。

「そうだろうな。おれでも八つ裂きにし兼ねないから。」

彼の言葉は独身者どくしんものの彼だけに言われるのに違ひなかつた。彼の友だちのY中尉は一年ほど前に妻帯してゐたために大抵たいてい

水兵や機関兵の上にわざと冷笑を浴びせていた。それはまた何ごとにも容易よういに弱みを見せまいとするふだんの彼の態度にも合がっしていることは確かだった。褐色の口髭くちひげの短い彼は一杯いっぱいの麦酒ビールに酔った時さえ、テエブルの上に頬杖ほおづえをつき、時々A中尉にこう言ったりしていた。

「どうだ、おれたちも鼠狩をしては？」

ある雨の晴れ上った朝、甲板士官かんばんだったA中尉はSと云う水兵に上陸を許可した。それは彼の小鼠を一匹、——しかも五体ごたいの整った小鼠を一匹とつたためだった。人一倍たぐま体の逞しいSは珍しい日の光を浴びたまま、幅の狭い舷梯げんていを下くだって行った。すると仲間の水兵が一人身軽ひとりに舷梯を登りながら、ちようど彼とすれ違う拍子ひょうしに常談じょうだんのように彼に声をかけた。

「おい、輸入ゆにゆうか？」

「うん、輸入だ。」

彼等の問答はA中尉の耳にはいらずにはいかなかった。彼はSを呼び戻し、甲板の上に立たせたまま、彼等の問答の意味を尋ね出した。

「輸入とは何か？」

Sはちやんと直立し、A中尉の顔を見ていたものの、明らかにしよげ切っているらしかった。

「輸入とは外から持^{そと}つて来たものであります。」

「何のために外から持^{そと}つて来たか？」

A中尉は勿論何のために持^{そと}つて来たかを承知していた。が、

Sの返事をしないのを見ると、急に彼に忌々^{いまいま}しさを感じ、力

一ぱい彼の頬^{ほお}を擲^{なぐ}りつけた。Sはちよつとよろめいたものの、

すぐにまた不動の姿勢をした。

「誰が外から持って来たか？」

Sはまた何とも答えなかつた。A中尉は彼を見つめながら、もう一度彼の横顔を張りつける場合を想像していた。

「誰だ？」

「わたくしの家内かないであります。」

「面会に来たときに持って来たのか？」

「はい。」

A中尉は何か心の中に微笑しずにはいられなかつた。

「何に入れて持って来たか？」

「菓子折に入れて持って来ました。」

「お前の家うちはどこにあるのか？」

「平坂下ひらさかしたであります。」

「お前の親たっしやは達者たっしやでいるか？」

「いえ、家内と二人暮らしであります。」

「子供はないのか？」

「はい。」

Sはこう云う問答の中も不安らしい容子を改めなかつた。

A中尉は彼を立たせて措いたまま、ちよつと横須賀の町へ目を移した。横須賀の町は山々の中にもごみごみと屋根を積み上げていた。それは日の光を浴びていたものの、妙に見すばらしい景色だった。

「お前の上陸は許可しないぞ。」

「はい。」

SはA中尉の黙っているのを見、どうしようかと迷っているらしかった。が、A中尉は次に命令する言葉を心の中に用意していた。が、しばらく何も言わずに甲板の上を歩いてい

た。「こいつは罰を受けるのを恐れている。」——そんな気もあらゆる上官のようにA中尉には愉快でないことはなかった。「もう善い。あっちへ行け。」

A中尉はやつとこう言った。Sは挙手の礼をした後、くると彼に後ろを向け、ハツチの方へ歩いて行こうとした。彼は微笑しないように努力しながら、Sの五六歩隔った後、俄かにまた「おい待て」と声をかけた。

「はい。」

Sは咄嗟にふり返った。が、不安はもう一度体中に漲つて来たらしかった。

「お前に言いつける用がある。平坂下にはクラツカアを売っている店があるな？」

「はい。」

「あのクラツカアを一袋買って来い。」

「今でありますか？」

「そうだ。今すぐに。」

A中尉は日に焼けたSの頬ほおに涙の流れるのを見のがさなかつた。――

それから二三日たつた後のち、A中尉はガングルウムのテエブルに女名前の手紙に目を通していた。手紙は桃色の書簡箋しよかんせんに覚束おぼつかないペンの字を並べたものだった。彼は一通り読んでしまうと、一本の巻煙草に火をつけながら、ちようど前にいたY中尉にこの手紙を投げ渡した。

「何だ、これは？……『昨日さくじつのことは夫の罪にては無之これなく、皆浅はかなるわたくしの心より起りしこと故、何とぞ不悪御あしからずゆるし下され度たくせうろう候。……なおまた御志おごころざしのほどは後のちまでも

忘れまじく』……………」

Y中尉は手紙を持ったまま、だんだん軽蔑けいべつの色を浮べ出した。それから無愛想ふあいそうにA中尉の顔を見、冷ひやかすように話しかけた。

「善根ぜんこんを積んだと云う気がするだろうか？」

「ふん、多少しないこともない。」

A中尉は軽がると受け流したまま、円窓まるまどの外を眺めていた。円窓の外に見えるのは雨あしの長い海ばかりだった。しかし彼はしばらくすると、俄にわかに何かに羞はじるようにこうY中尉に声をかけた。

「けれども妙に寂しいんだがね。あいつのビンタを張った時には可哀なんそうだとも何とも思わなかった癖くせに。……………」

Y中尉はちよつと疑惑ぎふとも躊躇ちゆうちよともつかない表情を示した。

それから何とも返事をしずくにテエブルの上の新聞を読みはじめた。ガンルウムの中には二人ふたりのほかにはちようど誰もい合わせなかった。が、テエブルの上のコップにはセロリイが何本もさしてあつた。A中尉もこの水々しいセロリイの葉を眺めたまま、やはり巻煙草ばかりふかしていた。こう云う素そつ気ないY中尉に不思議にも親しみを感じながら。……

2 三人

一等戦闘艦××はある海戦を終つた後のち、五隻の軍艦を従えながら、静かに鎮海湾ちんかいわんへ向つて行つた。海はいつか夜よるになつていた。が、左舷さげんの水平線の上には大きい鎌かまなりの月が一つ赤あかと空にかかつていた。二万噸トシの××の中は勿論まだ落

ち着かなかつた。しかしそれは勝利の後だけに活き活きとしていることは確かだつた。ただ小心者のK中尉だけはこう云う中にも疲れ切つた顔をしながら、何か用を見つけてはわざとそこそこを歩きまわつていた。

この海戦の始まる前夜、彼は甲板を歩いているうちにかすかな角燈の光を見つけ、そつとそこへ歩いて行つた。するとそこには年の若い軍楽隊の楽手が一人甲板の上に腹ばいになり、敵の目を避けた角燈の光に聖書を読んでいるのであつた。K中尉は何か感動し、この楽手に優しい言葉をかけた。楽手はちよいと驚いたらしかつた。が、相手の上官の小言を言わないことを発見すると、たちまち女らしい微笑を浮かべ、怯ず怯ず彼の言葉に答え出した。……しかしその若い楽手ももう今ではメエン・マストの根もとに中つた砲弾のために死骸

になつて横になつていた。K中尉は彼の死骸を見た時、俄かに「死は人をして静かならしむ」と云う文章を思い出した。もしK中尉自身も砲弾のために咄嗟に命を失つていたとすれば、——それは彼にはどう云う死よりも幸福のように思われるのだつた。

けれどもこの海戦の前の出来事は感じ易いK中尉の心^{いま}に未だにはつきり残つていた。戦闘準備を整えた一等戦闘艦××はやはり五隻の軍艦を従え、浪^{なみ}の高い海を進んで行つた。すると右舷^{うげん}の大砲が一門なぜか蓋^{ふた}を開かなかつた。しかももう水平線には敵の艦隊の挙げる煙も幾すじかかすかにたなびいていた。この手ぬかりを見た水兵たちの一人は砲身の上へ跨^{またが}るが早いか、身軽に砲口まで腹^{はらば}這つて行き、両足^{ふた}で蓋^{ふた}を押しあげようとした。しかし蓋をあけることは存外^{ぞんがい}容易には出来

ないらしかった。水兵は海を下にしたまま、何度も両足をあ
がくようにしていた。が、時々顔を挙げては白い歯を見せて
笑ったりもしていた。そのうちに××は大うねりに進路を右
へ曲げはじめた。同時にまた海は右舷全体へ凄まじい浪を浴
びせかけた。それは勿論あつと言う間に大砲に跨った水兵の
姿をさらってしまふのに足るものだった。海の中に落ちた水
兵は一生懸命に片手を挙げ、何かお声に叫んでいた。ブイ
は水兵たちの罵る声と一しよに海の上へ飛んで行つた。しか
し勿論××は敵の艦隊を前にした以上、ボオトをおろす訣に
は行かなかつた。水兵はブイにとりついたものの、見る見る
遠ざかるばかりだった。彼の運命は遅かれ早かれ溺死するの
に定まっていた。のみならず鱧はこの海にも決して少いとは
言われなかつた。……

若い楽手がくしゅの戦死に対するK中尉の心もちはこの海戦の前の出来事の記憶と対照を作らずにいる訣わけはなかった。彼は兵学校へはいったものの、いつか一度は自然主義の作家になることを空想していた。のみならず兵学校を卒業してからもモオパスサンの小説などを愛読していた。人生はこう云うK中尉には薄暗い一面を示し勝ちだった。彼は××に乗り組んだ後のち、エジプトの石棺せっかんに書いてあった「人生——戦闘せんとう」と云う言葉ことばを思い出し、××の将校や下士卒は勿論、××そのものこそ言葉通りにエジプト人の格言を鋼鉄に組み上げていると思つた。従つて楽手の死骸の前には何かあらゆる戦いを終つた静かさを感じずにはいられなかった。しかしあの水兵のようにならなくても生きようとする苦しさもたまらないと思わずにはいられなかった。

K中尉は額の汗を拭きながら、せめては風にでも吹かれるために後部甲板のハッチを登って行つた。すると十二吋の砲塔の前に綺麗に顔を剃つた甲板士官が一人両手を後ろに組んだまま、ぶらぶら甲板を歩いていてた。そのまた前には下士が一人頬骨の高い顔を半ば俯向け、砲塔を後ろに直立していた。K中尉はちよつと不快になり、そわそわ甲板士官の側へ歩み寄つた。

「どうしたんだ？」

「何、副長の点検前に便所へはいつていたもんだから。」

それは勿論軍艦の中では余り珍らしくない出来事だった。

K中尉はそこに腰をおろし、スタンションを取り払つた左舷の海や赤い鎌なりの月を眺め出した。あたりは甲板士官の靴の音のほかには人声も何も聞えなかつた。K中尉は幾分か気安

さを感じ、やつときようの海戦中の心もちなどを思い出していた。

「もう一度わたくしはお願い致します。善行賞はお取り上げになつても仕かたはありません。」

下士は俄に顔を挙げ、こう甲板士官に話しかけた。K中尉は思わず彼を見上げ、薄暗い彼の顔の上に何か真剣な表情を感じた。しかし快活な甲板士官はやはり両手を組んだまま、静かに甲板を歩きつづけていた。

「莫迦なことを言うな。」

「けれどもここに起立してはわたくしの部下に顔も合わせられません。進級の遅れるのも覚悟しております。」

「進級の遅れるのは一大事だ。それよりそこに起立している。甲板士官はこう言った後、気軽にまた甲板を歩きはじめた。」

K中尉も理智的には甲板士官に同意見だった。のみならずこの下士の名誉心を感傷的と思う気もちもない訣わけではなかった。が、じつと頭を垂たれた下士は妙にK中尉を不安にした。

「ここに起立しているのは恥辱ちじよくであります。」
下士は低い声に頼みつつづけた。

「それはお前の招いたことだ。」

「罰は甘んじて受けるつもりでおります。ただどうか起立していることは」

「ただ恥辱と云う立てまえから見れば、どちらうちも畢竟じつじやく同じことじゃないか？」

「しかし部下に威厳を失うのはわたくしとしては苦しいのであります。」

甲板士官は何とも答えなかつた。下士は、——下士もあき

らめたと見え、「あります」に力を入れたぎり、一言も言わずに佇たたずんでいた。K中尉はだんだん不安になり、（しかもまた一面にはこの下士の感傷主義に欺だまされまいと云う気もない訣わけではなかった。）何か彼のために言ってやりたいのを感じた。しかしその「何か」も口を出した時には特色のない言葉に変わっていた。

「静かだな。」

「うん。」

甲板士官はこう答えたなり、今度は願あこをなでて歩いていった。海戦の前夜にK中尉に「昔、木村重成きむらしげなりは……」などと言い、特に叮嚀ていねいに剃そっていた願あこを。……

この下士は罰をすました後のち、いつか行方不明ゆくえになってしまった。が、投身することは勿論もちろん当直とうちよくのある限りは絶対に出来な

いのに違ひなかつた。のみならず自殺の行われ易い石炭庫おこなの中にもいないことは半日とたたないうちに明かになつた。しかし彼の行方不明になつたことは確かに彼の死んだことだつた。彼は母や弟にそれぞれ遺書を残していた。彼に罰を加えた甲板士官は誰の目にも落ち着かなかつた。K中尉は小心しょうしんもビールのだけに人一倍彼に同情し、K中尉自身の飲まない麦酒を何杯も強しいずにはいられなかつた。が、同時にまた相手の酔うことを心配しずにもいられなかつた。

「何しろあいつは意地っぱりだつたからなあ。しかし死ななかつても善いいじゃないか？——」

相手は椅子いすからずり落ちかかつたなり、何度もこんな愚痴ぐちを繰り返していた。

「おれはただ立つていろと言つただけなんだ。それを何も死

ななくつたつて、……」

××の鎮海灣ちんかいわんへ碇泊ていはくした後のち、煙突えんとつの掃除そうじにはいつた機関兵は偶然この下士を発見した。彼は煙突の中に垂れた一すじの鎖くさりに縊死いししていた。が、彼の水兵服は勿論、皮や肉も焼け落ちたために下つているのは骸骨がいこつだけだった。こう云う話はガ
ンルウムにいたK中尉にも伝わらない訣わけはなかった。彼はこ
の下士の砲塔の前に佇たたずんでいた姿を思い出し、まだどこかに
赤い月の鎌なりにかかっているように感じた。

この三人の死はK中尉の心につつまでも暗い影を投げてい
た。彼はいつか彼等の中に人生全体さえ感じ出した。しかし
年月ねんげつはこの厭世えんせい主義者をいつか部内でも評判の善よい海軍少将
の一人に数えはじめた。彼は揮毫きごうを勧めすすめられても、滅多めったに筆
をとり上げたことはなかった。が、やむを得ない場合だけは

必ず画帖などにこう書いていた。

君看双眼色

きみみよそうがんのいろ
かたらざればうれいなきにたり

不語似無愁

3 一等戦闘艦××

一等戦闘艦××は横須賀軍港のドックにはいることになつた。修繕工事は容易に捗どらなかつた。二万噸の××は高い両舷の内外に無数の職工をたからせたまま、何度もいつにならだ苛立たしさを感じた。が、海に浮かんでいることも蠍にとりつかれることを思えば、むず痒い気もするのに違いなかつた。

横須賀軍港には××の友だちの△△も碇泊していた。一万

二千噸の△△は××よりも年の若い軍艦だった。彼等は広い海越しに時々声のない話をした。△△は××の年齢には勿論、造船技師の手落ちから舵かじの狂い易いことに同情していた。が、××を勉いたわめるために一度もそんな問題を話し合つたことはなかつた。のみならず何度も海戦をして来た××に対する尊敬のためにもいつも敬語を用いていた。

するとある曇つた午後、△△は火薬庫に火のはいつたために俄にわかに恐しい爆声を挙げ、半ば海中に横になつてしまった。××は勿論びつくりした。(もつとも大勢おおぜいの職工たちはこの××の震ふるえたのを物理的に解釈したのに違いなかつた。)海戦もしない△△の急に片輪かたわになつてしまふ、——それは實際××にはほとんど信じられないくらいだった。彼は努めて驚きを隠し、はるかに△△を励したりした。が、△△は傾いたまま、

炎や煙の立ち昇る中にただ唸り声を立てるだけだった。

それから三四日たった後、二万噸の××は両舷の水圧を失っていたためにだんだん甲板も乾割れはじめた。この容子を見た職工たちはいよいよ修繕工事を急ぎ出した。が、××はいつの間にか彼自身を見離していた。△△はまだ年も若いのに目の前の海に沈んでしまった。こう云う△△の運命を思えば、彼の生涯は少くとも喜びや苦しみを嘗め尽していた。××はもう昔になったある海戦の時を思い出した。それは旗もずたずたに裂ければ、マストさえ折れてしまう海戦だった。……

二万噸の××は白じらと乾いたドックの中に高だかと艦首を擡げていた。彼の前には巡洋艦や駆逐艇が何隻も出入していた。それから新らしい潜航艇や水上飛行機も見えないことはなかった。しかしそれ等は××には果なさを感ぜさせるば

かりだった。××は照ったり曇ったりする横須賀軍港を見渡したまま、じつと彼の運命を待ちつつづけていた。その間あいだもやはりおのずから甲板のじりじり反そり返かえって来るのに幾分か不安を感じながら。……

(昭和二年六月十日)

三つの窓

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～11月刊行

入力：j.utiyama

校正：多羅尾伴内

2004年1月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。